

## 武蔵野日曜聖書講筈

## 一デナリ

## ——マタイ伝第20章1～16節——

1958年6月1日

小池辰雄

天国は 二つの法則の中にある 今日一生 一日一デナリ 止むに止まれずして 労働を神聖として 永遠の生命の徴 放蕩息子の帰還 労働そのものが報酬で喜び マイナス無限大より プラス無限大へ 「一デナリ」 は即ち永遠の生命

## 【マタイ20】

1 天国は労働人を葡萄園に雇うために、朝早く出でたる主人のごとし。 2 一日、一デナリの約束をなして、労働人どもを葡萄園に遣す。 3 また九時ごろ出でて市場に空しく立つ者どもを見て、 4 「なんじらも葡萄園に往け、相当のものを与えん」といえば、彼らも往く。 5 十二時頃と三時頃に復いでて前のごとくす。 6 五時頃また出でしに、なお立つ者等のあるを見ていう「何ゆえ終日ここに空しく立つか」 7 かれら言う「たれも我らを雇わぬ故なり」 主人いう「なんじらも葡萄園に往け」 8 夕になりて葡萄園の主人その家司に言う「労働人を呼びて、後の者より始め先の者にまで賃銀をはらえ」 9 斯て五時ごろに雇われしもの来りて、おのおの一デナリを受く。 10 先の者きたりて、多く受くるならんと思ひしに、之も亦おのおの一デナリを受く。 11 受けしとき、家主にむかい呟きて言う、 12 「この後の者どもは僅に一時間はたらきたるに、汝は一日の労と暑さとを忍びたる我らと均しく、之を遇えり」 13 主人こたえて其の一人に言う「友よ、我なんじに不正をなさず、汝は我と一デナリの約束をせしにあらざるや。 14 己が物を取りて往け、この後の者に汝とひとしく与うるは、我が意なり。 15 わが物を我が意のままに為るは可からざるや、我よきが故に汝の目あしきか」 16 斯のごとく後なる者は先に、先なる者は後になるべし』

## ●天国は

福音書は大方やりましたけれども、まだ所々残っていますので、ちょうど落ち穂拾いのように、全然まだ触れてないところを時々やろうと思っています。マタイ伝20章もいまだかつて学んだことのないところですよ。私も示しを受けるまではみだりに語らないわけです。



どうもこのお話がなかなか昔はピンとこなかったものですから抜かしておいた。今日は神さまの真理に従って、いかなる註解書もまだ多分言っていないことになるだろうと思います。このお話を読んでいて一番先に

「天国は……」

と書いてあることをみんなうつかりしている。

1 天国は労働人を葡萄園に雇うために、朝早く出でたる主人のごとし。

と言つて、その事態を展開している。この大前提は、「天国は」という。そのことを忘れないでこの話を読んでいかないと、この話はわからない。

2 一日、一デナリの約束をなして、労働人どもを葡萄園に遣す。

一日は、6時、9時、12時、3時というように3時間ずつに区分されている。夜中の方もやっぱり同じことで、6時、9時、12時、3時、6時というようなわけです。夕方から数えると、夕方の6時からまたそうなる。朝の6時から夕方の6時から数えるんです。

「一デナリ」というのは、労働者の一日の労銀です。一デナリをいただくと、一日のご飯が食べられる。註解書を見ると、大体50円くらいです。もつとも、今の貨幣価値で果たして50円だか、それはちよつとわかりません。我々は普通の食物でいうと50円ではちよつと食べられないかもしれませんが。まあ、100円でもいい。とにかく、50円玉一つとしておきましょう。

この50円玉一つを約束されたわけです。そして、

3 また九時ごろ出でて市場に空しく立つ者どもを見て、

「朝早く」というのは大体、6時のことです。それから9時に行く。

4 「なんじらも葡萄園に往け、相当のものを与えん」といえば、彼らも往く。

これは別に、「一デナリ」とは言わない。「相当のもの」と言った。

5 十二時頃と三時頃に復いでて前のごとくす。

9時、12時、3時と。一番先は6時です。夕方の6時までで12時間労働だから、少しは休むでしょうが、とにかく半日です。起きている半日。昔は電気なんかありませんから、日が沈むとともに大体お休みというわけだ。お天道様と一緒に、お天道様が東にでる時に起き上がって、沈む時に寝れば、それが人間は自然とともに溶けこんでいますから一番健全だと思えますけれども、今日の社会ではそうはいかん。

6 五時頃また出でしに、なお立つ者等のあるを見ていう「何ゆえ終日ここに

空しく立つか」

「五時頃」という。もうやがて6時でお終いですから、1時間しか残っていない。朝から晩までほとんど何もしないでいたわけです。

7 かれらいう「たれも我らを雇わぬ故なり」

「誰も私たちを雇ってくれませんが、あぶれています」と。失業状態です。



主人いう「なんじらも葡萄園に往け」

この主人はおもしろい主人で、「それでは今日はいいや」なんてなことではなくて、1時間余っていても、「なんじらも葡萄園に往け」と言う。

8 夕ゆうぐべになりて葡萄園の主人その家司いえつかさに言う「労働人を呼びて、後あとの者より始め先の者にまで賃銀をはらえ」

「後の者より始め先の者にまで賃銀をはらえ」と、反対のことをやった。朝から晩まで働いた者に先ずやるのが、常識的なわけですが、「後の者から始めて先の者にまで賃銀をはらえ」とは、イエスの逆説的な意味あいがこういうところに実は出ているわけです。

9 斯かくて五時ごろに雇われしもの来りて、おのおの一デナリを受く。

後から来て、ちよこつと1時間働いた者がまつ先にもらつて、しかも、一デナリもらつたという。

10 先の者きたりて、多く受くるならんと思ひしに、

これはもう当然ですね。1時間で一デナリなら、10時間なら十デナリでいいわけです。

之またも亦おのおの一デナリを受く。11 受けしとき、家主にむかい咥つひぢきて言う、

この「咥つひぢきて言う」というところに注目をしなくてはいけない。これは不平なんです。正に労働問題です。ストライキというわけですな、もしこのまま放つておけば。「もう雇われないぞ、そんなことがあるものか」と、今ならたちまちそうです。

12 「この後の者どもは僅わずかに1時間はたらきたるに、汝は一日の労と暑さを

忍ひたびたる我らと均ひとしく、之あしひを遇あえり」

同じようにあしらつたと。これはどう考えても不合理である。訳がわからんと。これは私たちが考えても、正に訳がわからない。

13 主人こたえて其の一人に言う「友よ、我なんじに不正をなさず、汝は我と

一デナリの約束をせしにあらずや。14 己が物を取りて往け、

何を比較論をするかと。

この後の者に汝とひとしく与うるは、我が意こころなり。

これは私の勝手でござる、我が意志であると。

15 わが物を我が意のままに為するは可よからずや、我よきが故に汝の目あしきか」

新しい翻訳ではもう少し原語の味がでています。

「私がきまえよくしているので、ねたましく思うのか」

と、そういった気持がこの言葉の中にある。「汝の目あしきか」というのは、すが目、斜視です。俗に言う「やぶにらみ」ですね。「お前の目はやぶにらみか」と。斜めに斜視している人のことを妬んで、斜めに見る嫌な目つきがありますね。

「私は真正面に見ているのに、お前はやぶにらみをするか」というわけです。



16<sup>かく</sup>斯のごとく後なる者は先に、先なる者は後になるべし』  
 なにか謎のような話です。

この世の、我々の普通の社会も、労働問題はこれではもちろんいかん。聖書にこう書いてあるからこの通りしたら、社会は成り立たない。普通の世界ではもちろん、しかるべき時間と労力に従って、しかるべく差をつけるのは当然です。そういうことに対してまた別な角度から、キリストは

「ああ、それはその通り」

と仰るに違いない。それとこれとは別問題であるということをお話から受けとらなければならぬ。

## ●二つの法則の中にある

それは一番先に申しあげたとおり、「天国は」という。この世ではないんです、これは。

「天国はかくの如きものである」

と。この世の理法はある。ところが、天国の理法がある。ニュートンの法則があると共にアインシュタインの法則がある。ユークリッド幾何学があると共に非ユークリッド幾何学がある。いずれもそれぞれの角度からは真理である。ただ、より高次の真理、天国的真理、

天国的法則で——霊法、

「生命の御霊の法」

です——神の子らは生命の御霊の法で動いている。生命の御霊の法で動いている人たちはやはりその法則を身に体して、また身に受けていかななくてはならない。この世の法則ももちろんこの世の人として、この世の組織の中にある限りはその通り受けていい。けれども、もう一つ別な法則の世界で、それを大きく包んで、またそのもう一つ大きな世界で呼吸していなければならない。

私たちは生きています。なるほど肉体は生きています。肉体は生きていますから、ご飯を食べべて空気を吸って生きています。この現世の自然法則の人間として、私たちはそのように正に寸分たがわず物理法則で、生物法則で生きています。これも一つの生命現象です。

けれども、私たち人間が、クリスチャンが、神を信する者が生きていますというのは、もう一つ別な生きているという角度があるはずなんです。その別な生きているという角度は即ち、天の法則であり、天の生命をくらっている。空気を吸っていると同時に御霊の気を吸っている。これが私たちの実存構造でしょうが。

「もう私は御霊の生命がありますから、空気は吸いません」

と言う人は死にますよ。それは間違いになる。この世に置かれている限りはやはり、大きな角度から空気は神さまの恵みですから。これも自然法則を受けて生きている。ご飯をいただきます。けれども、もう一つ別な法則の世界がある。それがもつと高次になって、こ



の世の仕事が終われば、神さまはエノクのように取り上げるといふこともある。キリストなんか、もちろんいつでも取り上げられて差し支えないひとであった。

キリストもお腹がすいて、

「飢え給う」

ということが書いてある。また、悲しいときは、

「泣き給う」

と書いてある。また、笑われた。すべて、同じ弱き肉をとった人間、一個の人間です。一個の人間でありながら、神の霊が受肉している事態という別な実体がそこにある。

「血気の体」の体に対して、「霊の体」がちゃんと内側から血気の体を支配している。即ち、キリストは血気の体でありながら、また霊の体がそれを支配している。普通の知情意という人間のすべての感覚をもちながら、同時にこの霊感を深くもつておられる。即ち、霊人であると同時に普通の一個の人間である。その二つの法則の中にあるわけです。しかも、こちらの方（霊人）がもちろん優位をしめて、それが支配しているから本当の実存であります。これは霊人の世界、天国人の世界です。

だから、キリストは「天国は」と言われる。

「天国は労働人を葡萄園に雇うために云々」

と。この話を受けとるのに、いわゆるこの世の法則の角度からみたら、これは不条理です。明らかにそれは不条理です。けれども、その不条理が、不合理が、もう一つ素晴らしい世界に入ると、不合理どころのさわざでなかったということに気がつくわけです。

### ●今日一生

朝の6時からと、9時からと、12時からと、3時からと、そして5時からの方がいる。朝の6時からの方は完全に一日働いている。5時からの方は1時間。6時で仕事はお終いだから。それがみんな「一デナリ」です。全部等しく一デナリという。

マタイ伝6章を開くと、

「<sup>32</sup>……汝らの天の父は凡てこれらの物の汝らに必要なを知り給うなり。

衣食住のことです。

<sup>33</sup>まず神の国と神の義とを求めよ、然らば凡てこれらの物は汝らに加えられるべし。<sup>34</sup>この故に明日のことを思い煩うな、明日は明日みずから思い煩わん。

一日の労苦は一日にて足れり。」（マタイ6・32～34）

とある。内村先生が

「二日一生」

と言いました。それを私は、内村先生の精神をもう少しハッキリと生かそうと思って、

「今日一生」



と言いたい。今日この日が一生ということ。ドイツ語にも、

『今日ばかりではない、明日が、明日がある』と、すべての怠け者はそう言う」

という諺がある。明日というものを考えている人はいつも明日頼りをしていて、この日と  
ことわざいう、この日限りという、「今日を限りの命ともあらん」ということでない。今日、本日と  
 いうことが大事なんです。実は聖書の世界はこの今日という世界、本日という世界です。

「信仰と希望と愛とは限りなく残る」

という。希望はなるほど明日の世界でしょう。けれども、信仰というのは今日の世界なんです。信と愛とは今日の世界です。「今日」、あるいはもつとハッキリ言う、「今」ということ。現在の瞬間です。この現在の瞬間というのが信仰の世界です。あなた方が今ここに  
 ——あそこではない。

「今ここに」

という世界、これが信仰の世界です——今ここにという世界が現実であるならば、その人は初めて明日をもつ。希望をもつ。「今ここに」というものが本当になれば、その明日というものは本当にならない。だから、キリストは、

「神の国と神の義を求めよ」

と言われる。「神の国と神の義」は将来に待たるるものでなくて、神の国と神の義は今汝らに与えられるところのものである。

「神の国と神の義を明日に求めよ」

と言っているのではない。

「今、求めよ」

と言うんです。だから、

「二日の労苦は一日で足れり」

と言う。

## ●一日一デナリ

おもしろいことに、「一デナリ」はなるほど一日の労銀で、一日の生活の支えである。明日は明日の金である。

「江戸っ子は宵越しの金は持たない」

とか言う。藤井先生はあれが好きでね、貯金が大嫌いでした。先生が亡くなった時には、財布の中に一つもなかった。先生の全集が出て、そしてお子さん方はこの全集で養われた。生ける先生よりか死せる先生の方がむしろ経済力があつたわけです(笑)。

昨日、『藤井武の面影』という本ができてきましたから、どうぞ、皆さん、あれは是非お金を工面してお買いなさい。藤井先生の実存がよく表れていますから、いろんな意味において参考になります。そういう「一日一生」を、信頼でもって藤井先生は生き抜いた。あ



るときは、ご飯にお醤油をかけて食べていた。

これは

「二日の労苦は一日にて足れり」

と言う。もちろん、文化人として貯金していいですよ。そういう外側のことを言っているのではない。私たちがお金があろうがなかろうが、問題はいつも、すべてこれを私しないということですよ。申し上げているとおり、私有は即ち神有しんゆうである。わが財産は神の有ものである。まだ、「神有」なんてことを言った人があるかないか知らんけれども。私有、共有——共産という言葉があるけれども——神有というのは天国人が自覚するところの世界です。

だから、

「一日二デナリを与えた」

ということとは、その人にこの葡萄園の主人は、一日において一生を凝集しているところの在り方、その人の糧を与える。その人に本当に生命の糧を与えているということなんです。生命の糧を、今日限りの生命の糧を与えている。

11時間待たされたけれども、失職でどうにもならん、お腹がすいてしまっている。たった1時間ありついた。そうしたらやっぱり一日の、それを分割しないで、全的にこれを与えてくれた。計算をしないで、全的に与えてくれた。

時間によって、労働の量によっていろいろ計算して、どうのこうのというのは社会学の、経済学の方では極めて大事なことです。学問としてはどこまでもそれは厳密にやっついていかなければならないことです。

けれども、もう一つ大事なことは、そういったような相対的なものに——もう一つ絶対の角度からキリストはものを言っているのであって——これに全部、無差別平等に一日の生命の糧を与えた。これは即ちもはや労銀ではない。これは恵みの金、言い換えるとこれはボーナスというわけだな。「ボーナス」というのは「善きもの」という意味で——「最高善至高善」というのは神さまのことです——「善きもの」というのは恵みです。

「私の心が恵みであって、お前は斜め、嫉みそねであるか」

と。斜視は嫉み、斜めです、まともでない。ところが、これはなるほど約束したというけれども、約束は、このキリストの気合いから言うと、恵みの約束です。もちろん、このお話を表面からこの世的にみると、なるほどこれは労銀のように、報酬のようにみえますけれども。そういった報酬のように響くような言い方をしながら、キリストは、

「そうじゃないんだぞ」

ということをぐつと強く言おうとしている。これが即ち恵みなんです。一日働こうが、一時間働こうが、これはみな恵みです。

そうすると、マタイ伝5章のところとちよつと通ずることになってくる。これは私の大好きなところですよ。5章45節、



「<sup>45</sup>これ天にいます汝らの父の子とならん為なり。天の父はその日を悪しき者のうえにも、善き者のうえにも昇らせ、雨を正しき者にも、正しからぬ者にも降らせ給うなり。」(マタイ5・45)

神さまは不公平なことをなさらない。

「あいつは嫌なやつだから、少し曇らせてやろう」

なんていうのではない。みんな同じように雨を降らせ、日を注いでいる。これは恵みでしようが。この恵みは即ち何かというと、

「父の全き」

というのがこの恵みです。ルカ伝の方では、

「父の慈悲なるがごとく慈悲であれ」

という。父の憫み深さあわれというのは、相手がどうのこうのということあわれで差別をしないで、みんな同じように恵みを全的に与えている。

この労働人はなにも悪い人ではない。みんな結構な人です。一生懸命で待っている。みんな結構な人ですが、悪い者にすらも同じく恵みを与える。労働時間の云々ということや汗水たらしたその量の云々ということでもつて差別をしないところは、これは全部恵みなんです。多く働いた人は、

「どうもその恵みは少し不公平な恵みではないですか。せつかく朝から晩までへトへトに働いたのに、これはどういうわけだね」

とまた言いたくなる。どうしてでしょうね。

### ●止むに止まれず

ゲーテの詩にこういうのがある。そこに今ちょうど小鳥がいるから、思い出した。

「私は歌を歌う。けれども、私は止むやに止まれずして歌を歌っている。何か報酬を受けようと思つて歌うわけではありません。ちよつど、それは鳥がやむにやまれずして歌っているような具合に、自分も止むに止まれずして歌を歌うんです」

と。だから、王様が何か褒美を与えようとしたときに、

「いや、何もいりません。もし、恵みとして与えてくださるのなら、お酒を一杯ちよつだいしたい」

という詩がある。即ち、歌人は、

「これだけよく歌った。それでは王様の褒美を」

と言つて、歌ったことに対して王様からの何か報酬をもらえるのだが、自分は要らない。

「歌うことそのことが報酬である」

という句がある。歌うことそのものが即ち報酬である。王様の前で歌つたということ自身が自分にとっては喜びであり恵みであるという。



朝6時から夕方の6時まで、一日汗水たらして働いた人は、

「私はこの信頼する葡萄園の主人のために、また主人と心を一つにして、いや実にと、そうならなくてはならん。そうなたらば、長く働けば働くほど、そのこと自体が驚くべき恵みであります。一生懸命で働けば働くほどそのこと自身の中に力がきている。喜びがきている。だから、本当は報酬は要らないのです。けれども、神さまは恵みとして「一デナリ」を下さった。「一日の生命の糧」を下さったと。

実は、生命の本当の糧は働くことの中にきています。本当の生命は、本当の糧は、私たちが神と共に一日を本当に歩く。今日一日を100%に歩きつくす。働きつくす。

「労働は神聖なり」

というが、あなた方は、働くことは本当にその意味で、

「労働は神聖にして歓喜なり、喜びなり」

というところにこなくてはいいかん。いわゆる祈り三昧さんまいに入って、

「私はもう働くのは、勉強するのはいやだ」

なんて、もしそんなことをあなたの方の中に言う人があつたら、私は否いなと言います。神さまと共に働き、神さまの世界の中にあつて、学生は学生らしく勉強し、働き人は働き人らしくやる。この世の法則の中にありながら、その法則をもう一つ大きな靈法の中で満たしていく。その在り方が本当の健全な実存であります。それでなければ、真に正しい意味において文化を推進していくわけにいいかん。

「私たちは靈的な人間だから、今の文化世界なんかはどうでもいい」

と言って山に入るか。キリストはそういうことを要求していらつしやるのではない。もちろん、この世の曲がった法則や曲がった事態に対しては、正しい角度からこれを是正していかなくてはなりません。けれども、この世の法則の中を生きながら、それをもう一つ高次の法則で満たしていくという実存が本当の実存です。

申し上げているとおり、水は器の中に入れれば、器と同じ形になります。器の法則に従います。しかし、生ける水はこれを更に乗り越え流れていきます。花は

「自分はこういう姿をしているが、これはいやだ。私はバラみたいになりたい」

とは言わない。その固有の花の姿をもって、そののつぴきならない美わしさを表している。菖蒲しょうぶがそうである。ミヤコワスレがそうである。カーネーションがそうである。マーガレットがそうである。みなそれぞれのつぴきならない現れ方をして、その法則の中にありながら、太陽の光を、その光熱を、その生命を現象しているわけです。

どうか、皆さんが、御霊の世界で深くなり、進むに従つていよいよ謙虚に、そして本当の実存を行っていただきたいと思うのです。特にペンテコステで恵まれると、あとヘタすると浮く。浮いてはいかん。御霊が深く内住し、実存が健全に展開していかなければ。パ



ウロがなぜあのように、多角的な重厚な構造をもつてものを言っているか。それをよくわきまえていただきたい。もちろん、構造だけではダメです。構造の中に生命がなければもちろんダメですけれども。生命があるからと言って、その本当の在り方というものをいい加減にしたなら、生命そのものがこわれてしまう。

### ●労働を神聖として

「一デナリ」というものをみなそれぞれ働いていった。その働きにおいて、その与えられた時間というものをみな、これは神と共に葡萄園の主人の心を心とし、喜びを喜びとして行く。これが真の労働の精神です。本当の労働の精神はそこにある。

労働問題は、もし、雇い人も雇われ人も労働を神聖として、喜びとしてこの角度でいくならば、不公平なことは起きないように必ず上から本当の恵みがくる。労資どちらにも本当の恵みがきます。その一番大事な、見えない法則のこの厳かな世界をいい加減にしていって、外側のことばかり勘定するから、全体がおかしくなる。なるほど、一日働いた人は、

「私は一日働いたので、もう満ちあふれました。しかも、この喜びに満ちあふれた

そこに、まだ恵みが、一デナリがきました」

と言って喜ぶ。一時間働いた人の方は、それほど満ちなかったかもしれない。一生懸命で待っていたが、最後の一時間がきた。その一時間を本当日として働こうとして、この一時間を与えられた者が、質的に朝の6時から働いた者と同じような気合いでもって働いていくことが、この一時間を与えられた人の今度は実存であります。

例えば、80歳まで生きる人もある。30歳くらいで死ぬ人もある。けれども、この30で死ぬ人は、この30というものを本日に生きたらば、80あるいは100を越えて長寿する人よりも、はるかに質的に生きたということになる。

私は自分の亡くなった兄のことを想い出します。終りの数年、この信仰に入ってからの上昇というものは凄いです。その実存は、私がもう50歳をこえてもなお兄貴の終りの4、5年になわなわないと思う。それはやっぱりそのような質を、真に数年を100年として生きた。燃焼し尽くすような生き方をしたからです。

一時間であろうが一日であろうが、それぞれ与えられたものを全的に、

「神と共に、神の中に、キリストの中に」

という在り方自身が即ち喜びであり歓喜であり力であり報酬である。ここに私たちの実存の本当の角度がある。このことになったら、真の平安がくる。平安はその中に力がある。平安はその中に生命がある。休らいというものはただ眠っている世界ではない。本当に休らうということは、あなた方が日曜をこのようにして聖書において休らっている。聖書の中に休らうということは、聖書の中から永遠の生命、泉をいただくことです。



## ●永遠の生命の徴

マタイ伝の今の20章のちよつと前を読んでごらん下さい。ここに大事なことが書いてある。一切を捨ててかかるといふ全的な在り方というものに対する報酬は何であるかということが書いてある。マタイ伝19章の27節から30節くらいのところに、

「<sup>29</sup>また凡そ我が名のために或は家、或は兄弟、あるいは姉妹、あるいは父、或は母、或は子、或は田畑を棄つる者は数倍を受け、また永遠の生命を嗣がん。

<sup>30</sup>然れど多くの先なる者後に、後なる者先になるべし。」(マタイ19・29～30)  
とある。

「先なる者後に、後なる者先になるべし」

という言葉が、今日のお話と同じように後の方に書いてある。マタイ伝19章とマルコ伝10章とルカ伝18章に、今の「永遠の生命」のことがみな同じように書いてある。

「一切のものを棄ててかかれ。そうしたらば、永遠の生命だよ」

と。しかしながら、この永遠の生命は、私するために与えるのではない。神さまの証しです。永遠の生命というのは。神さまの証しのためにする。証しのための生命です。そうすれば、今まで棄てたものをみんな逆に救いあげる。決してキリストは不人情なことを仰るのではない。

こういう言葉をみると、何か福音というものは家庭やいろいろなものを破壊するような危険思想だと思う。そうじゃない。誰であろうと、他のものとは比較にならない、絶した質的な愛し方を神・キリストにおいてしなくては。そうしたらば、他のものは逆に本当に愛せることになるぞ。神と人間とを並べていたらば、本当に人を愛するなんてことはできないぞと、こういうわけです。私たちが真に人を愛するということは、この神の愛の中に入らなければできない。そのためには、左顧右眄がいらんというわけです。

それが即ち永遠の生命です。

「永遠の生命を受ける、嗣ぐ」

と言って、その後はこの葡萄園の譬話がきて、「一デナリ」ときたから、私はこの「一デナリ」は即ち「永遠の生命」を象徴していると思うわけです。

「一デナリを与える」

という、一日一生というこの生命の糧を与える。即ちこれはのつぴきならない生命の糧ですから、「永遠の生命」の徴であると思う。「一デナリ」において「永遠の生命」をみる。「永遠の生命」なら、10時間であろうと1時間であろうと、永遠の生命以上のものがありますかね。恵みでしょうが。

だから、本当に喜びをもってこれを受けとった者は永遠の生命を受けとる。眩いて、一デナリをもらった人は「一デナリ」が「一デナリ」にならない。やけ酒でも飲んでしまう。そして二日酔いくらいになってしまう。一日どころでない。せつかくいただいた恵みを今



度は逆にマイナスに使ってしまう。とんでもない話だ。

ところが、働くということは、労働は神聖である。

「ラボラーレ・エスト・オラーレ」(労働は祈りである)

という。働くことにおいて祈りがある。

「働くことが祈りである」

というような角度の生き方をしていれば、これが本当に恵みとして、

「あれは一時間一生懸命にやったが、あれももらったか。ああうれしい。もし一時

間働いて十分の一だったら、私は分けてやろう」

というくらいの気持ちになるわけですよ。

「けれども、やっぱり一時間で同じものをもらった。よかったね」

と。そうなってきたら、この一日を働いた人の実存は本当の実存であります。

「永遠の生命」は分けたいではいられないんです。「永遠の生命」は分けたいではいられない。あなた方も、こないだはペンテコステに一生懸命に献金してくださいました。これは神の幕屋の進展のため——武蔵野幕屋なんて小さなことを言っているのではない——福音の進展のために私たちは壮大な希望をもつて生きていかなければいけない。この永遠の生命をいただいで、恵みをいただいたら、あなた方が神さまに献げるものはやはり自分の生命を献げなくては。献金というものは——額の多少はいいですよ。けれども——その額の中にあなた方の永遠の生命、全生命を、魂をかけて献金してくださいよ。でなかったら、私は会費制度に直します。

なぜ、私は献金にしているかというのと、そのような自分の真心をこめてする献金の仕方をしていただきたいからです。およそこの席に連なっている人は例外なしに献金をしていただかなければ困る。献金をごまかしたら、神さまの前にごまかしたことになる。私は知らんですよ、神さまの前にごまかしたら。どうか、そういうことをどこまでも、神対我の世界でやっていっていただきたいと思えます。この葡萄園ぶどうぞのの主人あるじは50円玉において「永遠の生命」を象徴した。あなた方は、50円玉だか何だか知らんけれども、とにかくその与える献金において自分の生命を象徴し、その意味でやっていただきたいと思うわけです。

### ● 放蕩息子の帰還

いかにキリストが報酬ではなくして、恵みとしてこの話をなされたか。だから、「天国は」と言うんです。

「天国は労働人を葡萄園に云々する如き」

と。これは天国社会です。天国社会の靈法の世界です。働くことにおいて即ち報酬を真に受けている。でなければ、つまらないですよ。労働が苦しい。せつかく働いていて、そこに喜びがなかったらつまらん。私もまあ仕方がない、官吏です。けれども、生徒を相手に



やっている時は、その一時間にやっぱり生命を注いでいく。だから時々、

「君たち、このドイツ語の一時時間を本当に学んで、死すとも悔いはないという角度からドイツ語を教わっているか」

なんて言うのと、みな笑いますけれども。それは冗談じゃない。そういった気持でやってもらいたいわけです。

それと似たような精神はキリストのいろいろな譬話に現れている。あのルカ伝15章がやっぱりそうです。兄さんは父の許もとにいた。お父さんの許もとにいた。兄さんは□しかくみたいだ。弟は△さんかくだ。放蕩息子だから×ぼつでもいい。兄さんは□で、まことに正方形みたいな人間で、品行方正、学術優等です。一生懸命でお父さんの許もとでよく働いている。弟の方は遠国に行つて、さんざんお父さんの金を使って、放蕩してすつからかんになつて、半死半生、瀕死の状態になつてしまった。そして、目が覚めた。

「我、父の許に帰りゆかん」

と言つて、父のもとに帰つてきた。お父さんは遙かにこれを見て、走り迎えたという。抱いて口づけし、それからいろんなことをして、ご馳走まで与えて饗宴をした。

畑から帰つてきた兄は

「なんだ、えらく騒いでいるな」

と。僕の一人が、

「あなたの弟が帰つてきて、お父さんは大喜びで、こういうわけですよ」

と答えた。兄は、

「あいつはさんざん悪いことをして、ボロを着て帰つてきた。私はここでお父さんに忠実にしているのに、子牛一匹ご馳走してくれない」

と、不平たらたらである。ここでも呟いた。兄はお父さんのもとで一生懸命にやっていた。道徳的角度からは立派なんです。なにも非難されなくていい。けれども、この兄さんが本当にお父さんの心を心としていなかった。即ち、働いていることが一つの義務であつた。喜びでなかつた。ここに喜びがあるなら、そういうことにならない。

私たちが何かすべてのことをして、そこに歓喜が、喜びが伴っていないことは何かウソですよ。真の生命の世界には喜びがあるんです。台所のことをしましても、何をしましても。お母さんに言われても、言われてからするのではない。喜びをもつてするんです。この喜びがあれば、お父さんと一緒に、

「よく帰つてきたね。まあ、しょうがないけれども、よく帰つてきた」

と言つて、その喜びの魂なら、お父さんもこの兄さんを本当に誘つてやるわけです。それができないところに、彼は自己義認よじぎにんしていた、□を義よじとしていた。

「俺は報酬を受けるに価する者である」

といつて、自ら義としていた。



日本人には実は美わしい角度がある。何か、向こうの人はすぐ金でもって勘定しますけれども。

「そんなことのために私はしたんじゃありませんよ」

と、普通の、信仰も何もない人が正直にそう言います。そういう美わしい魂が今でもあります。そんなことを打算でやっているんじゃないと。

この兄さんが本当にお父さんの気持を受けて、喜んでお父さんと働いていれば、これが本当に「の許もとにある」というんです。空間的ではなくて、質的に魂の世界で許にある。ところが、兄は空間的には許にあつても、魂の世界では、天国の世界では遠くに行つてしまつていて。放蕩息子と同じように別な方の遠くに行つていて。弟が西に行つたとしたら、兄の魂は実は東の方にいるわけだ。魂は西と東に分かれてしまつた。「の許に」はどっちもいなかった。この兄弟はどっちも父の許にいなかった。だから、弟が帰つてきたらば、兄が

「ああ、俺は自分を今まで義と思つていたが、これはとんでもない間違いだつた」

と言え、これは本当に今度は帰るわけです。これができなかつたところにパリサイ精神がある。だから、キリストが、

「お前もこれを喜ぶのは当然ではないか」

と言われた。あれもやつぱり普通の道德の世界の角度から客観的に判断したらおかしなことが、この天国の世界からいくと、なるほどこれは共にいなかったわけです。

### ●労働そのものが報酬で喜び

これは本当にその中に入つて働いていなかったんです。せっかく、朝から働いていたけれども。「眩くらきて」ということで、報酬を打算していたわけだ。即ち、労働そのものが報酬であるという、喜びであるという、生命であるという角度を受けとつていなかった。

本当の実存にはすべて喜びが伴う。だから、私はドイツ語を教える初めての生徒に言うんです、

「ドイツ語は君たちは難しいと聞いている。けれども、難しいの何のと、語尾変化がたくさんあつて大変だのと思つたら、これは進まない。また、勉強すると思つてもダメだ。親しみなさい。あなた方はドイツ語に親しみなさい。親しみをもつて向かつていきなさい。毎日、ドイツ語の本を開いて、五分でも十分でもいいから、これに親しみなさい。勉強するなんて思つてはダメだよ」

と。慣れ親しんでいくと、それは喜びになる。今日はドイツ語を読まないから眠れないということになる(笑)。

「どうも眠りがおかしい。あつ、そうだ、そうだ、まだ読んでなかつた」

というわけで、電気をつけなおして、一頁これに親しむ。そうすると安眠できるなんてなわけですよ。それは本当です。私たちは何をするのでも、これに親しみをもつていく。親



しみは、別な言葉でいうと愛であります。

「私はドイツ語を愛する」

という言葉が一番先に教えてやった。ABCをやる最初の時間にそういうのを教えた。親しむ。親しんだら、勉強とか何とかいうことを考えないですんでしまう。そして、楽しくなるから進みますよ。何も難しいことはない。すべてが律法の世界から自由の世界へ、生命の世界へという福音の事態が、いかなるあなた方の営むことにもみんなしみとおつてゐる。

こないだのペンテコステの証言は大変よかった。神さまの事態を、恵みの事態を、この生命の喜びの世界を証しするというのが証しです。証言というものはそういうものですよ。ゴタゴタしたことはあまり言うものではない。証言とは、聞く人をして真に神の世界に、喜びの世界に入れてあげるといふことが証言です。その意味において、こないだのペンテコステは今までの感話証言会で一番よかったと私は思う。また、地方から来た人が本当に喜んで手紙をよこす。

「みなこれ栄光、賛美、御名にあれ」

ということ。私は何ものにもあらずということですよ。

いわゆる精神異常者とか精神病者とか言われて、お母さんが泣き悲しんで、かつて集会にやって来たあの娘さんがもう本当にあれ以来喜び、こないだのペンテコステでまた喜んで輝いて帰っていったでしょ。

「どうか、幕屋の方は何人でも私の所へ来て、集会してください」

というようにことを言っているそうです。それほどにまで満たされて喜びの世界に入って、村の人がどうしてこんなに変わったかと驚いていると、Sさんから言ってきました。

福音は大歓喜の音信おとずれ、生命の音信でありますから、霊法とは決して固苦しい法則ではない。喜びしき生命の展開してやまない法則です。花や何かを見ても、本当に生成展開してやまないのがこの福音の世界です。だから、恵みを受ければ受けるほど、この永遠の生命はいよいよその通りに証していかななくては。せざるを得ないというわけです。

そういうようなことになりました。私はこの話が本当に今度は親しくなった。「葡萄園の労働人」の譬話はたらきごとというのは、どうもピンとこなかったんですが、ピンとこないどころではない。これではなくてはならないということが受けとられてきたわけです。

### ● マイナス無限大よりプラス無限大へ

まだ、それと似たようなことがルカ伝の7章にもあります。7章41節あたりから、負債ゆるを免された人のことが出ています。みんな同じこの法則がキリストの言葉の中にそうやって働いている。「罪ある女が云々」というところの後の方だね。36節から、

「<sup>36</sup>ここに或るパリサイ人ともに食せん事をイエスに請こいたれば、パリサイ人



の家に入りて席につき給う。<sup>37</sup> 視よ、この町に罪ある一人の女あり。イエスのパリサイ人の家にて食事の席にい給うを知り、香油においあぶらの入りたる石膏の壺を持ちきたり、<sup>38</sup> 泣きつつ御足み近く後ろにたち、涙にて御足をうるおし、頭の髪けにて之を拭ぬぐい、また御足に接吻くちづけして香油を抹ぬれり。<sup>39</sup> イエスを招きたるパリサイ人これを見て、心のうちに言う『この人もし預言者ならば触る者の誰、如何なる女なるかを知らん、彼は罪人つみびとなるに』

またあいかわらず自己義認でもつて人を審さんでいるわけですな、「あれはあんな人間だ」というようなわけで。

40 イエス答えて言い給う『シモン、我なんじに言うことあり』シモン言う「師よ、言いたまえ」<sup>41</sup> 『或る債主かしぬしに二人の負債者ありて、一人はデナリ五百、一人は五十の負債おいめせしに、

「五百デナリ」だから、これは五百日の生命の糧だよ、約一年半の。

<sup>42</sup> 償つぐぬいかたなければ、債主かしぬしこの二人を免ゆるせり。

「五百デナリ」と「五十デナリ」、どうしても償つぐぬいかたなかったから免ゆるしたと。

されば二人のうち債主を愛することいずれか多き』<sup>43</sup> シモン答えて言う『われ思うに、多く免ゆるされたる者ならん』云々（ルカ7・36～43）

と。マイナス五百とマイナス五十と、片一方は十倍のマイナスです。そいつを棒引きにしてしまった。

「ああ、棒引きにされたから私はいいな」

と思つたら、このマイナス五百はダメであります。このマイナス五百が、いかに自分が神さまの前に申し訳わけなかつたか、人の前に申し訳わけなかつたかということ、罪は本当に悔い改めて、「罪の赦し」というものを本当に受けとる。自分がマイナス無限大の罪びとである。マイナス無限大の罪びとをキリストは赦す。そのキリストの赦しは私をマイナス無限大よりプラス無限大に返す。絶対値を等しくするようにして返してくれる。

パウロが、

「我は罪びとの首かしらなり」

と言つた。即ち、パウロは真四角だつた。あの放蕩息子の兄さんみたいに。パウロは真四角なパリサイ人だつた。正に己れの義につきては責むべきところなきパウロ。けれども、己を義よきとしていることほど、自分をプラスと思うことほど、いよいよマイナスなことはない。我をプラスと思うことほどマイナスなことはない。これが一番の罪というやつです。自分をマイナスと知っているのはまだいいんですが、プラスと知っているやつは一番始末がわるい。

プラスは神のものなんです。私たちはもともと神さまに造られたものなんです。私たちの中にはいろんなプラスがある。これはみな神さまのものですよ。そのプラスを私してい



るから、これはとんでもないマイナスだ。

「自分自身はせつかくのプラスをだいぶマイナスにして、どうも申し訳ありません」というのはいいですよ。ところが、

「我こそはプラスだ」

と思っていいたら、これはマイナスだ。パウロはそのプラスが復活のキリストでひっくり返されて、

「こんなプラスは塵芥だ」

と言った。そして、真に自分を「罪びとの首」、マイナスと受けとった。

今までプラスとしていたものは全部お返ししたらば、それに万倍するところのプラスを神さまはくださる。何をか恐れん。私たちは本当に神さまにお返しする角度の在り方になつていけば――自分でやってごらんなきい――正直、力が出るんだから。生命に展開するんだ。論より証拠というやつなんだから。

「こうですか、ああですか」

と考えている世界ではない。やってみるんです。考えて判断して入ることのできるような安っぽい世界ではない。

「十字架にかかってキリストは贖罪なされた」

という命題をいくら信じ込み考え、「そうです」と答案を書いても、これはダメなんです。それはやっぱり自分で受けとるまでは。受けとるまでは、それはどうにもならん。生命の世界は、手形ではないので、事実、実力の世界ですから仕方がない。

この罪ある女もマイナス五百デナリが免されたから、彼女は今度は本当にプラス五百デナリ以上のことを実存で展開を始めていく。償い方なき彼女が本当に償い方ある人にされるわけです。その悔い改めが来なかったらば、これはダメですよ。

そのようなわけで、あるいは、九十九匹をそつちのけにして一匹を尋ねてやまないということとか、これはみんな、

「天国はかくのごとき救いの世界である」

ということですよ。天国は向こう側の世界かと思つたらいかん。キリストは、

「その天国はお前たちの中に体得し体現しなければ、何の天国か」

と言うんです。天国は彼岸ではない。彼岸というのは、彼岸の世界を此岸にしなければ、真の彼岸とはならない。そして、真の彼岸には行けない。彼岸を此岸において受けとらなければ、私たちは彼岸に行けない。

### ●「一デナリ」は即ち永遠の生命

さっきのマタイ伝20章に戻ります。15節、

15 わが物を我が意のままに為るは可からずや、我よきが故に汝の目あしきか」



ちよつと妙な言い方をしています。自分の事態を自分の心のままにする。

「御意を成させ給え」

という祈りがあります。『ファウスト』の第二部第四幕のところに(一〇二五四行)、

「彼の胸は高き意志で満ちている」

という言葉がある。私たちの胸が神の意志で満ちている。聖意で充滿している、プレローマしている。正にこれはキリストのことを指し示していると言つてもいい——いや、『ファウスト』ではキリストではないですよ——キリストのことを言つてみるとみて差し支えないわけです。彼キリストにおいてはその心は神の意志で満ちている。神の意志でプレローマされている。

「汝の御意を成させ給え」

と言つて、傍観しているのではない。「御意を成させ給え」と祈つて、魂をあげているキリストの中に神の意志が満ちているわけです。いつも、祈りの世界で満たされておられたわけでしょう。

即ち、「葡萄園の主人」<sup>あるじ</sup>の心をこの労働者がその胸に満たしていたならば、先程申し上げたような事態が展開していく。眩きどころではなくて、喜びわかつという、また本当に一時間働いた者のためにも、

「ああ、永遠の生命をお前ももらったか」

と言つて喜ぶことになる。「一デナリ」において「永遠の生命」ということをどの註解書にも書いてないが、私はこのところの気合いはかく読まざるをえない。

私たちがそのようにして、自分の生命を献げる気持でやっていたら、そこにまたいつも永遠の生命が満たしてきますから。何をしていても、これは本当の実存が展開する。健全な在り方が出てくる。祈りが実存に展開してないような祈りであつたらば、それはいわゆる祈り三昧<sup>さんまい</sup>というやつで、これはおかしい。どうか、皆さん、いつも私が言うとおりの

「観念にも非ず、御利益にも非ず、靈的傲慢にも非ず、パリサイにも非ず」

という、この「四つの非ず」にないところの健全な世界を進んでいただきたい。

あなた方一人びとりのつぴきならない生き方がある。みな選ばれているんですよ。

「あの人はばかに近ごろ恵まれてしまつてはいるが、私はどうもそうでないが、これはいけないか」

と、そんな引け目はとつてはいかんですよ。みな、

「よろずのことに時あり」

で、一人びとり大事な、神さまはその順序をもつていらつしやる。神の秩序というのがあります。ですから、一足飛びのことなんかしなくたつていい。どうか、皆さん、自分が謙虚に祈り、実存し、聖書を学んでいくなれば、一人びとりが一人びとりの在り方で行くんです。決してみんな等しくある型になんか、私は絶対にはめようとしていない。それは真理でない。



朝からちようどありつく人もあれば、やっと人生の終りになって神さまの国の労働にありつく人もある。けれども恵みは一緒にやつてくるではないですか。十字架にかかった盗賊が最後の瞬間に、

「私は悪いことをしまして申しわけない。とてもダメです。それでもどうか、

あなたが覚えてください、御国に入るときは」

と言つたら、キリストは、

「今日、汝は我と共にパラダイスにあるぞ」

という世界です。それぞれのつぴきならない法則と選びがある。選びにも時ありですから。みんな選ばれている。万人が選びの中に実は入っている。万人が選ばれている。ただし、その選ばれていることを自覚しないで反抗しているから、神さまはせっかく万人を救おうと思つているのに、落ちる人はあるだろう。けれども、

「あれがこうだから、ああだから」

と人を見てたらダメです。もちろん、参考にすることは結構です。けれども、それによつて妬みだの**つぶや**だのを起こしたらダメです。

それぞれの人間の生まれつきの、肉体の条件も、魂の条件も、いろいろありますよ。それぞれにできているんだから。決して一様に神さまは造つていらつしやるのではない。それぞれの在り方において神さまは、一人びとりをみんな千差万別ののつぴきならない靈法の在り方をもつてとらえる。だから、自分においてはどのように神さまはこれを本当に展開してくださるのか。これを正直に受けとつていく。そうするとき、これが神の愛の中に大きな大調和となるゆえんであります。

真の平安と本当の喜びと真の望みとをこの角度から受けとつていくことです。そして、この福音は、皆さん、どうしても伝えざるを得ないではないですか。真にあなた方が一年間に一人、二人と、自分は友人を何とかして救いの中に入れてあげたいという念願と――決して強いてはいけませんよ、強いてはいけませんけれども――その祈りと努力をしていくなら、必ず神さまは展開してくださる。それは神の世界に入れる喜びは、人ひとりの魂が救いの中に入ることほどうれしいことではないのであります。どうか、そんなわけで、みなそれぞれがそれぞれにおいて実存すること自身がまた使命であり伝道でありますから、よくわきまえて行つていただきたい。

そういう意味において、今日の葡萄園の話は、何とこれは本当に無理なく、楽しい世界だなあということですよ。一時間でも質的にいくし、一日でもまたそれはみな同じく神の喜びにあずかる。葡萄園の主人の意志がその胸の中に充満しているような在り方をしているならば、これが即ち喜びで力である。「一デナリ」は即ちみな永遠の生命をもつて恵まれるというわけでありませう。おわかります。

